

源註拾遺

卷首
卷一

大意
桐壺
夕顏

篇木
若紫

空蟬

一



源註拾遺序卷

大意



此抄源抄抄の大詔るるハ河海より始る事記
の遠つるを其要の忠を傳寫の誤於日本紀万
葉集よありとてむねなる事の本書よあり
きとるに後ふよき人の傳きつる事
つる抄よきとて本よき傳き人の忠を
るる事いづれも傳つて板屋を契つて川
るに後ふよき此一忠の事いづれに傳
てくる抄よきとて本よき傳き人の忠を
ありとて本よきとて本よき傳き人の忠を

んまゝにうゝゆゝくさぬ。まふけ源氏の物語一の巻
より——これこそ源氏の肉のうゝあやのうゝまを
よゝいもや終つてあゝいもあゝけををすていつてん
またけ物語んせんとあゝいもあゝいもふいとけをく
あゝい歌うるまををなる人のあやうゝのあゝい
あゝいわゝいゝわゝいゝわゝいゝわゝいゝわゝいゝわゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
——後なるものをまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

入てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

くわきさう——はうあ——いふちもくきうあふ
くわきさう——あふなふるんむう居氏のゆ
都立路のちねのうねあめ女きさのやうにこそ
あふきさ思ひくるんま川いふさうあふいふきさ
又云さうその粒をう——あふその日あをうづあ
ふさふをねん——あふて立路の海よりきう
きめ舟のあふさうたるをのこさめ舟をまふ人殺
もあふあふさうあふさうきさあて神さういま
くうて都ああふさうさうわうさうさうあふ舟も
よめだうさうさうさうさうさうさうさうさう
はあさうもさふえわさうさうさうさうさうさう

さだのおうさうに立路のまれむすめさうさうあ
るをうさうあふさうさうさうさうさうさうさう
んとゆう——くわい——あふさう——きささう——きさあ
なとあひはさうさうさうさうさうさうさうさうさう
の立路あをうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

○以上おきお終はけさうさうさうさうさうさうさう
級記おさうさう——又けあさうさうさうさうさうさう
けさう

一様云わさうさうさうさうさうさうさうさうさう
の立路あふさうさうさうさうさうさうさうさうさう

をぶふんるわざもぐるとありせと都のしらねあ
りたをぶふんるはふまきと終るにふせくうりね
きなりてなりあるまゝのておほくうきさ
るもあぬいとにきくうはぐらふふ
の光源氏のもむれ浦よ志保されいび終るんを
まひさくぞくや海くありされる

又云源氏ま 源氏二字今うりよ
よ源氏まともなり の内うちけこつにい
とさうやいこのちうまはとせ終るてはさう
光るさいきさをいづきよやとんきせめふ女ま
又云何うつこかちつ引よせささひてこや
昔のあくあふんうねいうねとや光源氏のた

まひくるものをいひのこまひさねとけりんざらふと
づううきあつめあつるゑどもなめたる

右様衣ふ源氏を引くるは為時作してむるお
母の作するお終なれども様衣とも作お終るお
るたるるにけして引用るお僻書抄は様衣
の作者大式三信よりけり

一平判官源頼入は法名性照なる宝持集方厚
安法戒を説いて云はちく嵯峨やと云をい
源氏お終と造りく罪よりうて地獄に墮る
若患おびがうたふとや源氏お終を破る
捨て一日経をきて吊りくべくと人の夢より

しるしや古き物語のあと集りに入れた伊勢物語に
たのもしき拾遺集 巻二

そのきや我侍人いふきあづちあづちのあつてんとい
目ふさふさなるもそのあつてんといふきあづちのあつてん
けいこけいこいふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
一常衣物語と云ふふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
今一人林三郎のあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
一明星云此河原のあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
西宮左大臣のあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
けいこいふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
より寛弘元年迄三十六年あつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
よりあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん

五十年あつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
なれど五十年あつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
て大貳三位をいふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん

一更級日記の源氏の五十年あつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
とつて今流布する本は源氏物語の五十年あつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
帖もあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
まを天台寺のあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
の中は天台寺のあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
ふつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
の源氏物語のあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん
なれどあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてんといふきあづちのあつてん

やうにも檀那院僧等一心三観の血脈を継
—————たゞ武戸天台法門の意を知ると
持姫のきよ法師とありて、———ちたを
娘の日記も———お珠引とけしきと
さるゝ女は似合ぬ———うたをさるゝのこころ
事いさぐ———後のご———なぶめき
なるなり

一武部が名は此上のもを一部よ———て詮と書
くるなる———日記の公任のこを、又級お後ふ紫
のお後と———平院と———

一武部とされ———時兄の惟親と、りふ父の時よ

史記をよむ、おひくるふ武戸———よみとる、
ありねをの———も、ある時、ひく、
は女のま名をさるゝ、———と、ひて、一の字
を、さるゝ、———た、———ひくる、
の日記よ———

一けお後、昔の記もあり、時が、は、武戸が、化、れ
さるゝ、———お、———て、———

一宮、おの、記、あり、———お、———
の、お、ひ、———、———、古、今、密、劔、
さるゝ、———、———、お、ひ、———
お、———、———、———、———、

てんぐー式刀が此物語をうゝんと引てあぐ
せんといふまゝくねとて身あめて一部始終好色
よけてうゝるふ換やうもくもぐー雪玉賢良な
ごふねらうてうゝるあや叶えぐーて罪をねらねど
よや地獄は入ふらん原氏の篇をよこさあやうーハ
父子よけていゝる何のねど君ふけていゝる又何の
ねど白鳥記の浮舟よけーまゝつゝハ朋友あけて
何のねど夕暮草のあやうーハまゝめんよけー
まゝど夕暮ハ篇をよけーくちて板木のまゝ
ふ信あくゝるもの字派申免の白鳥記よけー逆られ
てのねだくたうつゝも罪をくゝるゝんまゝ

の褒貶ハ善人の善行悪人の悪行を面ふき
てくねいゝうねいゝとんやゝねどてゝ勸を懲
悪明らうたま此物語ハ一人の上よゝる悪おま
るねるををきやゝ何ぞを春秋あはせん
一古抄は各家の化儀化法の両程の四教なごの沙汰を
やぎくゝる物語をこもーきおとる篇蓮ハ
おまゝき機の上もふちめのこといゝつゝまゝ
ーくなることいゝつゝまゝ物語の中ふその人なる
ぬ法師いゝむとなごのうゝきいゝあねど
ーまゝらゝるーまゝーまゝーまゝ
その作者をいゝて又さるーまゝとせん

前参議徳清

限りとて出難くもあづきふをたゞぞうき
おちし時横笛を

舟車法師

笛の音をたゞき世にふ傳つていもく成人やうん
あるもの、ゆくゆくはうづらうふ日記より信者おほ
るさそ歌あり 五千餘帖の中よりとらうきふめ
つきとらうきをなきいそらうき のうも詩文め長
短あつたれどけふがふもめをもき歌はけうき
うやとらうき

一毛詩ふ八國雖蝨斯等の篇ハ后妃の徳化をふ
鄭衛の詩ハ淫放をいふむ 吾も水火のどく一仁

文章よあつてハ鄭衛の詩もあつてはくこの物語
ハ人々のよふ吾も新乱せうきとらうき 此文など
にたつてハ説くべし

一 吾も言ふ可脱花をきふめとらうき

一 歌はきふ時をてハ越えあつてあるハ得て後拾遺集別神
云ちのりふ歌はきふめとらうき おちのりふ
より 源為朝臣のりふはうき

吾も惟親

吾も言ふ可脱花をきふめとらうき 歌はきふめとらうき
新後拾遺集ハちのりふのりふ歌はきふめとらうき
てまついといふきとらうき

をさねいふよりうたふよりいふのうたの奇を
よみておこせと侍りしうたを越後のはり
しうたにのびたりとせとちいふ時が返事をい
あつたあて送て侍りしうたをさねと
とぞしうたよりうたよりいふのうたといふ
所のうた意三ふちのうたよりいふあは侍る
と記おきしうたよりいふあは侍る。赤院の中
うたよりいふ

有東のうた

都もいふきよのあはれいふあはれいふいふ
うたはきよのあはれいふあはれいふいふ
を侍てさねをさねいふの事あり

又新勅撰新語よ 有るは惟親が誠はつり侍
るふはつり侍る

うたやいふいふうたは衣あはれいふあはれいふ
是又為時よつきて侍る時のあはれいふあはれ
らよてあはれいふあはれいふあはれいふあはれ
を父が侍るうたのあはれいふあはれいふあはれ

一為時ハ常三品の才子よて侍文をよみていふあはれ
侍るうたよりいふ惟親も侍文をよみていふあはれ
のあはれいふあはれいふあはれいふあはれ

一はあはれいふあはれいふあはれいふあはれいふあはれ
あはれいふあはれいふあはれいふあはれいふあはれ
あはれいふあはれいふあはれいふあはれいふあはれ

一新續古今集雜中云源氏物語の揚名介の事を患ふ朝臣よ尋侍々として申送りなる

はるゝ玉のまぶさ夕白のやうあらずけきくともな事

丹波忠司

んあてふそれと斗健へきてぬさうまゝめ文部の方
 かゝいあきで揚名問答源流秘訣あをこゝれを
 大こゝれぬらうこ

一此物語の中は、あま集より入るハ新拾遺集新
中ノ歌なりとぞ
紫式部

紫武部

里の名を記すふれど山崎のふれどうづのふれど
 作

一法ある此物語のたをうつる中にも用あらず何れ
なりなるもあり法花小治へ史記左傳などよ
なるといふことありなどたるいふんさるる何れ
とも假名にある物も似合はざるや作志のうけ
くきくつる事を述べる月何事をもて用べ
べきの次第源氏昇をこの次第等ハ用あるもの
なり

一 沛堂園自山家心はくさつてゐる奥あそび
これ信じてゐるが、その彼入るに終るハ完
仁三年をおバ此のうらやめてのち十五年
もるづいあふづい居るうらやめておらん
りぞあそびあめ

紫式部日記云々をのちいふ人侍りあや
しうさぶらふようにならるゝえき侍りぬ
ふきききききききききききききききき
源氏のおづう人あやめききききききき
よこの人ハ日本紀をこそよめききききき
えあづいとのいまりせきをききききき
いふうあきききききききききききき
日本紀の成つたきききききききききき
侍るこのふききききききききききき
をききききききききききききききき
いふ人のきききききききききききき
史記のふききききききききききき
時

倫子

雅親

わざとぐくねおは侍りける源氏のお徳おまへ
よあまをよのちんぐでまいのもろごとくしで
くもついでふ梅の志こよあふれくもくもよかせ
つ梅の志こよあふれくもくもよかせ
をねと名りたふれく人のなをでるいあふ

人よまこをまぬのをふれくはまきおごいにおえ
くねくもよあふれくく武甲がくもあふ

一三箇大事とりける源氏秘訣よくせ給つり
但うつがふれくハ三之一とりけるくもあふ

左傳まぐいさぐく三夜武もお徳のこ李郭王記を
よてあふれくく川社よあふれくく
又月お徳まも此事あふ抄よむる李郭王記乃
武よくも又揚名介は清徳公の揚名関内のか
揚名関内よ信西入たがくも事きふて
つくもくこのあふれくくあふれくく
けなふ

源註拾遺卷第一

桐壺

はき

うきみ

夕ふ

多紫

桐壺

以今按二字
置愚意初

いゝやんごるきぢうゝいあゝぬが

帰きをめて上宿のおをりゝき止事と云

○今按やんごるきとらつ詞大に結るゝ但又只や
むををぬゝもいゝるゝ

後拾遺^四羣旅^五部の^六とある^七あう^八と^九の^{一〇}あ^{一一}を
うみの^{一二}あ^{一三}へ^{一四}ま^{一五}う^{一六}り^{一七}り^{一八}傳^{一九}る^{二〇}た^{二一}ふ^{二二}女^{二三}の^{二四}あ^{二五}や^{二六}り
て^{二七}い^{二八}つ^{二九}き^{三〇}て^{三一}さ^{三二}う^{三三}か^{三四}ゝ^{三五}お^{三六}ろ^{三七}え^{三八}ん^{三九}事^{四〇}に^{四一}二^{四二}三^{四三}日^{四四}傳^{四五}り
て^{四六}や^{四七}む^{四八}る^{四九}る^{五〇}記^{五一}事^{五二}ふ^{五三}う^{五四}て^{五五}ま^{五六}う^{五七}り^{五八}三^{五九}々^{六〇}ね^{六一}ぞ^{六二}衣^{六三}を
つ^{六四}ゝ^{六五}そ^{六六}ね^{六七}が^{六八}上^{六九}う^{七〇}ま^{七一}て^{七二}お^{七三}ろ^{七四}り^{七五}傳^{七六}る^{七七}る^{七八}け^{七九}や^{八〇}ん^{八一}ど
あ^{八二}き^{八三}い^{八四}え^{八五}や^{八六}む^{八七}も^{八八}ど^{八九}記^{九〇}事^{九一}と^{九二}て^{九三}出^{九四}る^{九五}を^{九六}り^{九七}つ^{九八}り^{九九}止^{一〇〇}事

あゝのちふおもひやりけたるきを紫上へいめさ
しと見えよ

こねこ冷眼のきよあゝに

一ねをおよつともうやとつふ引あゝおと
そめふのき

○今按河花集下上 和泉武戸歌なり新いれ
ば引ふあふあゝいあゝに

一ちとぐちなるを

○今案和名云周易說卦云其於木也為堅多心カナキハト
多心 凄奈 可吉 可遲 何うちとつふとつふいハ皆
け多の字なり

いゝあゝ

○今案日本紀云赤箇をあゝきとよめす病のお
そめきと舊上癢をあゝきいとよめきふあを
せて思ふ病の癢きを癢とつてききを原
一とつふや

一あゝめをそめあゝいとまぞゆき人のちええ
細流 まぞゆきを人のそめきておもむらぬうちと
流とつふ

○今按細流いめをそめあゝとつふあゝつて起るわが
く流とつとちええとつふふれは日のかや一
まぞめてんづいあゝのきとるじきや

一いつとちたき事おめりきで

深ふよりおめりきで

○今拙此泥叶をば梅子子よけいりきおと
いつとの部より人をよづよおりてきし出る
りのみしとめりきで

竹取おどろふまいたつともきしとあるもきしと
てりきしとつとつとつとつとつとつとつとつと
ん何とてきしとつとつとつとつとつとつとつと
けるきしとつとつとつとつとつとつとつとつと
きしとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
きしとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

いふ義ありきおめりきで
いふとちたき事おめりきで

一此序よりいふとちたき事おめりきで
細 忝稷非聲明徳惟馨とつとつとつとつとつと
白ひといつと又あつとつとつとつとつとつと

○今拙これいふとちたき事おめりきで
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

在仙窟并万葉の字をあらわしとつとつとつと
なり朝日のあらは花れとつとつとつとつとつと

下ふえようたる揚き妃はうもいづきえりとい
ども中あきうあうくれはといふなりと云々
てんぐべー

一けいふのまづいさせぬ

○今按りうなるの記ふ無別 日本紀無破万葉とる

日本紀ふ無別のまづいなり 無破ハ昔家
万葉よりなり

一けいふのまづいさせぬ

○今按りうなるの記ふ無別 日本紀無破万葉とる

一けいふのまづいさせぬ

孟 目なり

○今案万葉并七云

大舟をあきふいづーいふはなきあきふいづーいふはなき
目をあけておをるる目つきをいふと目ととの
ある記ハ目つき

一けいふのまづいさせぬ

○今按りうなるの記ふ無別 日本紀無破万葉とる

拾遺別

戒秀法師

あきふいづーいふはなきあきふいづーいふはなき

同急上

実方松後

何せん小會をうけてちういんりつとやと思ふ時とて

後拾遺

山式刀内侍

志ぬぞうかあるきふこうに新がしきとてうづき家あるは

新古今別

夜系惟親

都も思ふ人のとおろそげにうゑいんと思ふ

日

石金法師

別路にこそや限の遠きもいふいづきとておね

大和物語

おねとてやあるづいやりつゝいひまがいにちかたれ

後拾遺と名傷

伴勢大輔

あまのさの日はういぬりきてりまもつゝぬ人をさし

一歩つゝいのちきふあともなきふ

○今葉河海は交加をゆきうふとてい何ふ出

万葉ふい往及とうなり

一歩つゝといふふ

河多新地をいふ

○今葉和名抄は壹宿郡ふる戸の外別ふ愛

宿心あり

一歩つゝといふとあふ

○今葉土佐日記は

あるのといふはつゝ一歩も人をいひいふとて

一んぞのあづき
河平 ナラカ 日本紀

○今按日本紀小平の字なづけりて後るなり
一すけり

○無人記 日本紀

今按日本紀け云なり

一あつてそこハ

奥入 何る時あめのきこひふけりきあつてそふあつりり

○今按奥入ふ引きこるる今考事バ古帖五抄後
何る時あめのきこひふかききききりのと別てき
けあハあつて奥入のあなり 何ふ出りりや

一けりふそきききき

孟津 咲花すふ肌寒将室あ説く物をア用

○今案万葉小膚の字をあてをださむともあ
あり 将の字をうり事なり

一あつてそこハ

集 ツト 日本紀 都

○今案日本紀は集の字つとよめる事なり推量
さるふ神集をわあつとよめるを言は後
ころをそれいつとよめてこそあ事又都の字も
はとよめるなり ちとよめとハ常ふよめるも日
本紀ふハあつてとよめり

一多由那の露吹くさぶ風の音ふゆきぐれをきけけやま

花 細
多少腫ハ多中のふえ
露吹もさふハ源をいふ

○今案在深處の故集より地分しつるありふをさ
あき人をいふもいふをさふやういふやうなり

新古今新下

人の新

あつ吹風いつめと多本町のやぶらうをききとて
けぢあふよきとバ多本町の只中をのりよりん料
とて多本小からうりてハ多本町きり又あむぶ
風のきりてきりる気涙もきりき

一之志事不中善之成于人乎ハ

古事記は雄略天皇わさきの大官人つとよまむ孫つる伊弉諾あり彼にまてハ百官の治法あつたハ河海の祝あつたなり百歳城と書さふ
付て案さるる小治神天皇磯城瑞籬宮はまゝして世をさうめは事六十八年めてさき此世をたの此官をのそいてさきさつて
そのころハ古事記は磯城を師木とわき
たつ小万葉集も百師木と書まハのどく
此義ハもとをよむ
とつて 同契神記

河百友の序を及ぶ標中を百友とす

○今按万葉ふけ詞おろきふ百歳城百師本を
どうきて一而も百歳とうくるるなり百歳もちこ
空々ぬ先よりの詞之又百歳とうふハ大救めそそと
河海の後おろきなり
一いつくむの孫志ろき浅ちふよ

○今案河海ふ此泥ふ後撰秋中あゝ近江更衣の
五月ふふぬきし。―袖をとひふ衣を引きし。後
撰とある傳寫の誤なり。

一いゝさう
抄寂冥 サウミ
和名 さき

○今世なりきとるきをさう

とらふ利権の習ひ此致あり 万葉よさびき
おハ不樂とも不懐ともうさつ事 なるをの
さびといふはあゝに万葉よさめふハ此字
のこころふよめる奇阿や

一 乃 女

河
影ウミメ護タマフ
和名
ふりくるきやうの義之

○今案和名ふ今く、新護の字なり凡そやうれ
態藝の字ハ和名よりきりぞかれしものなり
ふあるをバおく

一あま風ふき起しのうしろ

○今拙稿遺難下東三條太政大臣の書款す

多のこし地陰あつてびちるるふに星の星をみ
風のあつきうふいあそとせそきたりを
ふせきいつふ

一色ふくろ 楊貴妃のうしろハハ 起るゝゝゝ
第ふくろ あはれふくろハハ 起るゝゝゝ

○今栗梅菓子よりふくけておろる物といふ中より物
 持ふてたしと皆しるをとをんあわしとちと
 うなり

一、おちかへし

河
イ
ト
カ
シ
最
押
タ
チ
ヤ
ト
ク
立
才
日
本
紀

○今果日本紀ふすの字をかゝるゝとよめれど

よりそれどもうけとらうとよめるるの此を何
出さうやあがりつる一 只人のうけてさむくぬ
意をたぐる事もなきをいふもこれと思へ家
体にとりつても叶うべ

一こよあへく

無越 奥入 孟 殊の外とふて

○今果中勢集よまき此殿上人の所てふ
さうきもくふ深きたれと急あて袖へ秋なる
これさうてくゆうのあきまゝこの外もあふ
ていうさづきを初ハけりぞ

一あづきむ

孟 眩近 ちれむつぶる

○今按此詞とふあきふおや一 意ハ孟津のどく
アもきとて字ハアもふ

一あきづんの女師まゝ此まゝも出あつてき
ゆ急

側とあまさほふむるぬん

このあきづきの説
のめくさるべし
物後よつていふ側

○今果とつて物後菊宴の神あふ

うささうけつての板がくあをさるる一 席あへた
楓稜を文選あをさるる一とよめり和名抄云唐
韻云楓稜 楓稜ニ音和 木名也又四方木也
かといふまゝハ物あさつる意をさるるあど
たもといふまゝこの木もさるる一まきあそ

一三三

河
髮
臥

○今案此二字出所卷一

和名云唐韻云髟告

計及新名
毛止利

髮也四聲字苑云

髮

音還和名美豆
良一云訓上同

屈髮也

一 ひとかきひちあるなり

河
雅

日本紀

年のゆくゑ

○今案日本紀の稚の字を神代紀わゝとい

よきとまゐるゝと

肝キム
稚シ

舒明紀

帚木

一さきこ

河 逸 日本紀

数奇

白氏文集

○今案日本紀小逸の字をくともある事を
一さきともすくともある事ある未考
数奇ハ漢書李廣傳ふ出く是ハ別の義なる
上小音訓大ゆ違つり嗜の字好の字なりを
くともむべき字なれど何の字もまゝくを
くと逃せるをんぞ

一肉の清お

河 儀軌曰云々

○今案儀軌ハ秘密の經の中ハ佛菩薩を供奉
する儀法の儀形此軌刻を説く所を抽出
釈一連ハ儀軌といふ儀軌なるをち經にさし
八家あつて各請來の經儀軌おき中ふやう
の事とする儀軌なりこれ本經陰陽家の偽作
なるべし一抽きの秘訓をりて無戒の齋の字を
そのいさよあり

一をさく 三つねま

○今案万葉集十に東三のふ
とやの神ふをさく神なりをさくは神なりともある
此をさく一の神なりとめをさく神なりなり

さね新うねそて君ひうふ女の母れ咄付てか
己人の魁を新うふぞくうねひ新ひく見付ら
るこをさねをうけてをさくふとつり新うへ
こゆゑは不寝子^{子又ユ}なこ子とい女なうたふこ
ろぞろは母被^{ハニキラハレ}嫌し又大ね物後よお吾アハのま
け中納まの君あーのびて新こまひそめてう
とねくおうまうて後けをさくこひさよたざ
りうり又やうてけり小殿上あもをさく人き
あゆとあやなを引合てつるまふもさうてか
とせむたことといふは似たり
一むつまゆえ新ひく。

孟思ふと何う人おもふ人きさくひてさこれにき
○今果此新に接遠るはふる上句おもあてい
こそ人ふあふとめとけり陽記のあやまりて
きさくまや

一お月あふちうて
○今果おほまのけづを乃何切奈おわつて
かといふより胆ふけつとつづきをよ胆あふ
どいふ同く焼ハ油そこもを物おねをけ
らといふ和名ふ焼盡を阿布良都岐とよめり
万葉歌十八は焼を安布良火とよめり
一かこころづきこころとゆう新てまバ

うめ出てはるふつうう

わがを改め

人志ある人徳ある人ものいふてあめたることいふらん

そ

明日香糸女

酒の衣ふあつては福あるものなり 待人もなり

一そふころあつてつとつ終つてめ

は 是下こ

○今葉を二下とんはハ大由撰まう万葉あ

そこハ彼處ここの此所とあて和語こそあつても

こたつともといふ事をそこの力つてつてよめ

一あひまきこめけ

尖 オノキ

苗 川

○今葉は二字何れも出る元日本紀をふいんぞ

只生 オノサキ 前の葉なり

一あつてふづうのあつて

○今葉もあつて

湯原五

こつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

又同 一 ち

あつて

こつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

らへの字九字などのあつてあつてあつてあつて

一世あふまづきもちをく

○今案万葉歌一云うづきをを鶴寸と假字ふ書
中十二ふい多頭寸とくうう物おバカリハ法を
通れる物

一むらやうとひて人のふけるよわづらひ

○今案史記伍子胥傳不軌をわづらふとあり
一そむし一孫とありけつめぞく

河 火影 日本紀

○今案火影とつる河日本紀あり
万葉歌十了

さき一火のうけふかきうえ原の姥ふえまの佛とる

一あぐわいづをきつてふとくづらふとあり

○今案古今序はえふく女をんていづらふ
ふとくづらふとあり

一それきつととらふとありあつらふとあり
くつらふとあり

○今案河下さん 孟 腐さんのお義腐さんといふ
ころハあきとらふとありあつらふとあり

一えとけとおほふとありあつらふとあり
あふとなくあつらふとありあつらふとあり
あつらふとありあつらふとあり

今案はのさきしきあつらふとありあつらふとあり

ハナニヤウなる返事を以て「あ」とおひいて又
文をよれどもつゝなまこぶで返すせむと申しセ
てふくしよ人をあやましき

一 乞うなきりとうー
細 貧相たるあきまの字ハ漏字なりー此類
復小あきま

○今案多美相主人母イハナレとらふるべし遊仙窟
小主人母をいつとと魚さの六帖并五の歌小
家童子を思とあつをあ人泣布の言也
他のうきくる本まで授有くうふハ假名
てどいともあり

日本紀第十八卷 元秦天皇の后忍坂大中姫いすく
をとめいそ母の御体おおいしきりける時國
雞造とや者のとくしきりまいるせらるをくらた
ちてあつくまを越えさるりつるこふ戸母此云
觀自と何事ハ女をまらあひをさむる此上の
老女をりあふもさるせ越えさる和名小負
を刀自とさむあふもさるしきりまふ若菜小田小
怪鳥女々姫お送る音あわさるの刀自とよ
めきもあふあふさるしきりまふ乳童子とさる
心持たさるさるしきりまふ後の人の名ふりける
とくをさるしきりまふ若菜あふさる

一 漢とさういふ

○今業は権ふ

いふの世中の法はさういふに漢とさういふ

一 わつふとさういふに漢とさういふ

○今業は権ふ

いふの世中の法はさういふに漢とさういふ

一 わつふとさういふに漢とさういふ

○今業は権ふ

いふの世中の法はさういふに漢とさういふ

一 わつふとさういふに漢とさういふ

○今業は権ふ
いふの世中の法はさういふに漢とさういふ
一 わつふとさういふに漢とさういふ

一 あまのゆきとさういふに漢とさういふ

○今業は権ふ
いふの世中の法はさういふに漢とさういふ
一 わつふとさういふに漢とさういふ

○今業は権ふ
いふの世中の法はさういふに漢とさういふ
一 わつふとさういふに漢とさういふ

聞而雖不知新喪之如毛キテテニラ子トモニイモノコトモ子ナキツカモ注鶴鴨

いね縁こころハ眼目といひ後降といふこころ
一多とんゆきハ今のゆゑすゝとあすりのゆゑ
とあすりのゆゑとあすりの文章とあすり
とあすりのゆゑとあすりの文章とあすり
こひふおもひハ俗にいふ縁ひねのこころ

一ふさこころ

後漢書註鄭玄曰礼記曰后之言コトモ後言在夫
之後故以女謂後達

○今按故以より下の六字あつたあ後漢書
を考へへ一御等といふを考へへ

本朝文粹第一慰少男女詩菅徒耽弾琴者

岡蒼称弁御俗謂貴女為御蓋取貴人女御之義也

何御といふたらしき女よりおこりてさぬ

一何さ御身を

○を案大和物語の仲平平仲うゑこのそらさうと

いふをたこころ世にいふさうさうと

いふその武蔵の事の一辰といふ

一うちいふさう

舌出舌出遊仙窟

○今案遊仙窟の舌出の二字あり

○万策中已小
家持

百年の老舌^{オイシタ}出^{イデ}而^ハ余年^{トヨ}とあひとも無^ムきす

よむとハハようをさる大徳のいし記をきかしたる
るをうとふきうてあつとふくひぬり強
うといふふあよせて業とされよき事をた
るをいふれうとせうとふくしめしめ
よハ津のあぐれゆるをいふあつととなこ
いふこれあつとあつとあつとあつと
てあつとあつとあつとあつと

一上三
 ねをうけ守二おんね
 事あり花女の
 事くわあす
 の歌おおい

今更そふりぬともかへ已まれといひあふ

して入るは此老古虫の印を留て遊仙窟といふ
「そのあひさうのしきうあひさうやあ」くさ
うさ

〇々葉詠ふ此廿七字異曲のありとくり
 ころありそねあふりしあそきたつひそりた
 りありあひそひてとくをりもわらんそそ
 をりそりし中へちきりふりあれ
 りありとくりつりのつるぬえ狩思ふやとく
 のいふやなをりあといふとの歌るるや
 一むけあゆむいふあふたもいふあふくらたき
 られあふつるあふかふあふあふえ傳る

○を葉拾遺をみふ

眼めしうしうしうそをゆるねむころのあきと
おもて此をのんえのき下のるる人
けちうきまうさの中をいそごうるふいおさて
あををかんよはいといきほひとあじろのいを
よきゆあひいんる

○今按有意

コロミラス 日中紀オサ 八天武紀上

苦のすをあらねしとよき一はき表のふり
又あきふしうあのみすかふの妹とて後一は
あり然れまをと後へ

今葉のすはふ截三侍賢門院女藤
るあれ木のあれしむき若のす紙あひ
すをいかにふしういなるをい何お生
あきとせうは仮あつひのそごうるうとる
あねあきういあるといふむいたさかな
きすはありそれをすをのてくいより
仮名のゆたあきは藍をきふさあきよ
りれしむき若のきあといつげたるは仮
いふゆたしういふむいさといふゆ
きふふ藤のきふしういなり然きとも
ふかきいあきい

一、つゝけおむす、善くもえす。

り
ハ

○ 之葉、葉、十三の奇小

藤浪乃思オモヒ纏マツル若草乃思就ツキ西ニ

一ちく福ちのちうやく

○今按後撰遺誹諧少ひるを以て傳ふる人今
 多しやぬ之と以て人のものとふやうた
 りるふなこの傳ふるや七月七日のついで

皇太后宮陸奧

君が此の書をこれより一ヶ月以内に

一 ちぬのきりしむくし

○之按日本紀小
喧御音の字を
ととふいと
ふなり

詞苑集 雜上 志のいふ男のありたるをぬ
をうへ海とておのけさへある

和泉式了

著せぬはくしを
 一をより

又靜なるを

今更なるやうにして柔々の他の相状ハ
此れぢやうといふ事も依おれりといふ事

春海云やをふやうと
と同一やわと通ふ
ふをやをうととい
てさて根はの義かち
う一十年今より物後
は根の字をせちき校
衣は戸のやをう一
おててといふを奉
はやとてとて

ふりやうなる静なる家といふけしやう
といふといふにやうに

一このちやうにやう

○今葉母屋といふに母いふにあつたおまの言葉
あり日中紀事集ある音におもひををわいの
よるふ唯ふぬー母を古歌におもひといふに
つる恩のききめある人ーおもひををわいの
まゝの屋なりといふにーおまの出るにあつた
の家はこれいふにやうにやうにやうにやうに
又近世式ふ身屋といふにやうにやうにやうに
ふにやうにやうに身屋といふにやうにやうに

いふにやうにやうに身屋といふにやうにやうに

地名

一或る家の娘君といふにやうにやうにやうに
をををといふにやうにやうにやうにやうに
うにやうにやうにやうにやうにやうに

細多ハ方お初するゆえ音を二件も知るにやうに
孟方曲といふにやうにやうにやうにやうに
久におもひなりををといふにやうにやうに

○今葉古泥あるにやうに和名お云野王按云煩音煩
豆保面ノ旁目ノ下之部をうにやうにやうに
うゆいふにやうにやうにやうにやうに

枕草子よりなる新しきおきねたるをせし
あつめきね^おれてうきせたりゆきも
しつゝいり方ハ甫亡切きて假名ほろ
こふよりて万葉をふハ波の假名より
今ハほろこふといふものつゝ

一 けいひあそぼうそ

河勝人奴細雄研
日本紀

○々葉に海ふ出されし字何より出たるを
以て細流ふ出さるる二字日本紀の中にあらず
といふ言あるを

一伊左の介ハカツて又思ふんあいうはえい

くのとて思ひて侍るを

○今按大和物語云 中院の西方のまじい 彌の大鏡を
のめふといふうりりるをりふ 平仲よりきて
ててててる

世下
一
五の地ふみとりまゝさねわつる和をささるゝたのむい
廿五いゝこのあうしゝちりもあひたうほとよそ
婦たる人ぞ

○之掌をちうひは筋帯角遠をんはるるを
下はちあをいふ初あれはちうちうをい
ふへ

一、あゝねのまゝ

二

細とり入るもぬや世帯をかりあつてのひき思へ
○今葉北音何ふ出さるぬのきなきとあ
さくもさきあみ月のせちよしきさすあ
たふのあやめ思ひしつゝぬええあ
ぬ秘をえきけ

○そ葉あふのあやめ高痛うけてしりえあ
らぬハ伊勢おけふふのきふりしえきそ
あつたれしきぬええああきもあ
宗縁をうけてしきふりしつゝぬえ
えあつたれしきぬええああきもあ
ハ極あつたれしきぬええああきもあ

ねあれしこれハおけふぬええあ
と同縁あつたれしきぬええあ
さきあみ月
ふに根をふち上のあやめ根えそれを
ほくおもふもきれしきぬええあ
さきあみ月
うけしき

二六

○一九日のえむあつたれしきぬええあ
いとまきなりふさしきのあをうとあやめ
さうの

○そ葉あふのあやめ高痛うけてしりえあ

五

新古今和歌集

A red circular seal impression, likely a collector's or library's mark, is located in the upper right margin of the page.

泣きふさふさあふあふ

詔かゝるを得を思ひのうきなり

あふき

○之葉花叶はなありせう此の葉あひさるか
り糸印しゝをぬきおむのうして作
らんと云ふ人もあるがこれいふを
せうくんと云ふので又是をうへん
するをつまみといふあそびもある

と

四六ウ

あとハきーあ

河
吾
子
目
記

○今案日本記ハハ不濁美の字を用ゐたを
 一ありあきとみづう同音と云ふも自然不
 濁とあはれとみづうとれとみづうと又
 自然不濁とれとみづうとみづうとあきとみづう
 系ありとれハあきとみづうとみづうと
 一ありとみづうとみづうと

〇今東の方から来た馬と云ふ事いふとこれ
 つふ人のいふとさういふとさういふと
 さういふとさういふとさういふとさう
 いふとさういふとさういふとさういふと

あつむ花れきふさのふゆのあひさし
 文はゆふさき事さうさうさう
 有てふさしー人ゆふさき紙のさうさう
 もさひーさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 一人あつむ花れきふさのふゆのあひさし
 後さうさうさうさうさうさう
 ○さうさうさうさうさうさうさう
 うれさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう

空蟬

一あひさうさうさうさう
 後さうさうさう

○今果茂けさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 ○さうさうさうさうさうさうさう
 裳帯於臍下而笑虎向立ッ
 是さうさうさうさうさう

河傍側

花飽足

○今案故何あつてとて清くそを還す
一かひもあつてハツてとてあつてとてあつて
孟垣ヲ見 万 関 カキ

○今案新案ハ 恒る足あつてとて目も記ハ
視其私屏をわいせしとよめることハ恒る
又之関の字ハつてとて何ふよめること

一風あつてとてせしとてたてむけとてあつて
細屏風あつてとて細の類ハ又えとて

○今案新案ハ 恒る足あつてとて目も記ハ
ろきとてあつてとてたてむけとてあつてとて
久しとてむけとてとて 恒る足あつてとて

ろきとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ
つてとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ
とてとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ
ろきとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ
ろきとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ
ろきとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ

一かひもあつてとてたてむけとて屏風たてむ

○今案日也記中ハたてむけとて屏風たてむ
とてとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ

一かひもあつてとてたてむけとて屏風たてむ
とてとてあつてとてたてむけとて屏風たてむ

○今案けとて今篇伊勢集ハあつてとてたてむ

ハミナニヤ今考ふ事あり
うづせをもとふ事一たふしうまに唐ふ事いふ事
此等のいふ古人是元換一なる

日本純神代卷又
仁徳純ノ事有

夕顔

一 およりりひくむくくわぬ新

○今案 徒倚 日本紀

一 かさるる事いふ

孟 網繻 日本紀選 延喜式

○今案上の字も書ふあり

細る月 頑也 頑愚のんあうあふ

ほの字はくもむ

何をあうあふあふ

いかさういふかてれあふいふ

あふと源はうさうあふ

夕顔

コシロラ
日本記

○今案

○二のうけ

○今案 目録に云

アキスラ
ミアカシトモス
大捨 燈 燈

○一はのうけ

○今按 兼補を提中綱とていふは西郷は監命
婦のうけあるをうけと有るのうけ

○一はのうけのそとあつたれぬやうな人

○今案 兼補十の授意云いふのとあつたれぬやうな
ちよとんれと云ふものなり

喜のうけとていふかゝるものなりとていふ
これら何ふあつたかといふことなり

新古今 三

乃信 乃信

こゝろにあつたものなりとていふ
故にうけと云ふやうな人なり

○今按 兼補はは布理と云ふやうな人なり
あつた今の人と云ふやうな人なり
乃信は乃信と云ふやうな人なり
をうけし事記は布理と云ふやうな人なり
故にあつたやうな人なり
と云ふやうな人なり
こゝろにあつたものなりとていふ
故にうけと云ふやうな人なり

ちあふとれいづつふめさあふとれ
まゐるくむあく死ぬるこころふけき

○川あふとれをあらひ

○今業敏達紀云於是綾糟等懼然恐懼乃

丁泊瀬中流向三諸岳漱氷而盟曰

○是と云ふをあらひ

○今業敏達

立振るも死を思ふ人あつたふあ
口をいふおと出のきこえをこころをあらはに
まゐるゆゑあふとれとあふとれをあらはに
わだのあふとれをあらはにあらはにあらはに

伊勢物語 歌ふあけいふを

○清つひあめのかきくち

○今業敏達集

あふとれをあらはにあらはにあらはに
文をあらはにあらはにあらはにあらはに

○あえうやえええ

○今業敏達九流を津名歌平安
あふとれをあらはにあらはにあらはに

○い

○今業敏達をあらはにあらはにあらはに

あゝの山嶺をふもてさきうへへ
此ももたぬを柳の白根をさき
今もさきふもてさきうへへ
誰をさきふ、さきふ花をさき
とさきふてさきふとさきふ
彼をさきふはさきふとさきふ
さきふとさきふはさきふ
定家もさきふとさきふ
とさきふ、暗にさきふ
おさきふ、さきふ

あゝの山嶺をふもてさきうへへ

あゝの山嶺をふもてさきうへへ

あゝの山嶺をふもてさきうへへ

あゝの山嶺をふもてさきうへへ

あゝの山嶺をふもてさきうへへ

あゝの山嶺をふもてさきうへへ

極む高なぬれうぬれあまておのく人そほ
一よきたる成家いれ

○今按透くは登れ又個お登くは登れは海
や川をる万葉のまゐあけ

一えりうのつちをみやくそつとくれ
○今案行ちぬ海

今とてあまの羽衣をいふとて是といふものにあひひ
とつちの葉をうけて

一まふくや花のうらうらなれはまふくや花のうらうら
は花のうらうらなれはまふくや花のうらうら
やえりくは葉のまふくや花のうらうら

る海をいふうらうらなれはまふくや花のうらうら
まふくや花のうらうらなれはまふくや花のうらうら

○今案源氏のまふくや花のうらうらなれはまふくや花
ふ葉の上を喻て花のうらうらなれはまふくや花
はまふくや花のうらうらなれはまふくや花
まふくや花のうらうらなれはまふくや花
てまふくや花のうらうらなれはまふくや花
のうらうらなれはまふくや花のうらうらなれはまふくや花
まふくや花のうらうらなれはまふくや花

まふくや花のうらうらなれはまふくや花
まふくや花のうらうらなれはまふくや花
は海

それなれども、さういふ中、の處、の、さういふ
よ、の、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、
い、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、

一、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、
○今案、氣、不、思、ま、さ、う、乃、に、い、れ、う、の、や
一、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、

奥入

君をいつても、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、
○今案、け、さ、何、う、出、る、六、帖、五
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

我、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
一、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、
○今案、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
一、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、
一、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、

河事計為与 万葉

○今案、河、海、の、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
一、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、
側、方、便、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

一、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、の、さういふ、

○今按 六帖

ゆふくれを結者の山と云ふなり ぬるを結もきん

一 おか 人まやと

預をよみのあまけふ松さうおるいおか人まやと云

○今按 これいづれ 万葉十宗

溪入の河を少舟さうおるいお思ふ君の起ぬ結も

湊の河を少舟さうおるい今を思ふと云ふ

かのと云ふれいさふ引を少河に云

城にうたかじ小舟さうおるいお人まや起さうお

一あけのつとものさう

○今案 後撰

さの葉あけあるおといひさう 思ふいふ思ふ

うた 表をいあけのといひさう 思ふいふ思ふ

萬感集

このををあけあるおといひさう 思ふいふ思ふ

一人つてあそびさう 思ふいふ思ふ

○今案 後撰

いさそかたさういふさう 思ふいふ思ふ

一河の浦をいさめかたさう 思ふいふ思ふ

細 草のさういふさうの浦をいさめ

○今案 萬感集の浦をいさめさうのさう

ハ得あるを以細流ふより新く是る草乃若
ふとせらるる小羽多をわく小芦を抵てはうら
のうとよめるをて明りあり
又えき系集ふかのえきるを隠影よよめるを
難波とせきと小舟ハ河にのえきるをくもくられ
これハ蘆分小舟さうお舟のふてあては乃
あて事なるは越こきさる福乃久きとよめり
あてき草ハエふやうあるあてよめり
古事記にも武^御雷神建御名方神の御子
を元孫ハ若芦のとりとて又万葉第二
の奇小芦若末乃足痛吾執と後り別は江

一
一
一

孟
卒

伊勢物語

○今案伊勢物語といふといふは
玄來といふかハそくといふは卒の字目
紀万葉集といふといふあり
一
一
一

○今案史記樊噲傳云上獨枕一官者卧
日本紀第六座仁紀云時天皇枕皇后勝而盡
寢同仁德紀云俄而集別皇子枕皇女之
勝以卧 万葉第五娘子奇云
いふあふ日乃時ふも多知ん人のむのふとせん



